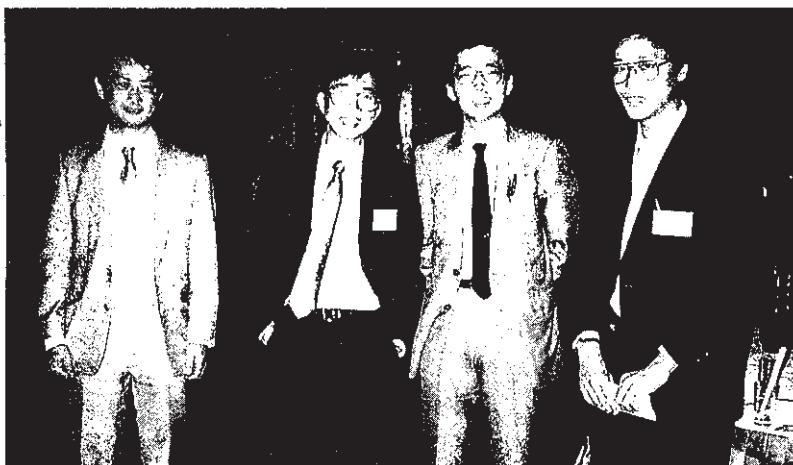




物理から有機材料へ転身



大学院時代の安達千波矢さん(右端)=1988年(九州大提供)

探究する人

次世代有機EL 安達千波矢さん ②

有機EL開発に取り

組む安達千波矢さん
(50)は高校時代、「数

式は美しい」と物理に
魅せられ、中央大物理
学科に進んだ。だが大
学3年の時に、外部の
研究者の講義を聞き、
光を出す有機物に出合
う。

難しそうだが、やり
がいはありそうだ。「こ
れだ」と決め、九州大
大学院の有機材料研究
室に進学。蛍光材料を
使う有機ELを研究し

博士号取得後、リコ
ーで勤務。1991年、

た。

40度の高熱を押して米
国の会議に参加し、フ
ォレストという研究者

と出会った。誘われて
訪れた大学は日本とは

違い、充実した設備が
博士号取得後、リコー
ーで勤務。1991年、

た。

40度の高熱を押して米
国の会議に参加し、フ
ォレストとい

い」と願った。
99年、念願がかなう。

フォレスト氏は、当時
プリンストン大の教
授。3年間、教授の下
で研究した。

想像を絶する厳しさ
だった。1週間徹夜で
取ったデータでも、す
んなりとは通らない。
けんかのような議論
の繰り返し。論文の草
稿を渡すと翌日、追加
データを要求する赤
ペンのチェックが大量
に付いて戻ってきた。

「そういう状態でも
楽しむ人しか残れなか
つた」

フォレスト氏らはそ
のころ、発光効率が高
い第2世代の有機EL
を開発した。安達さん
も関わったが、ベンチ
マークを立ち上げて実用
化させる過程を目の當
たりにして、米国の底力
を感じた。

米国での研究、試練の日々